

〈原著論文〉

## 新潟県立長岡工業学校における卒業生の進路

烏田直哉\*

### はじめに

本稿の目的は、新潟県立長岡工業学校の同窓会誌から、同校の卒業生がどのような進路をたどったのか、どのような「ものづくり」の現場で活躍したのかを明らかにすることである。現在の新潟県立長岡工業高等学校同窓会、歴史資料室所蔵の史料群（【図表1】参照）を用いる。

工業学校卒業生の動向について分析した先行研究をおさえる。工業学校の社会的機能については、教育史や教育社会学、あるいは経営学においても研究対象とされてきた。

【図表1】長工同窓会歴史資料室所蔵 同窓会誌

編者	標題	発行年
新潟県立工業学校同窓会編	第壹号 会誌	明治45年2月
[新潟県立工業学校同窓会] 編	会誌 第拾号 (大正六年)	[大正6年]
新潟県立工業学校同窓会編	会誌 第拾参号 (大正八年)	大正8年1月
新潟県立工業学校同窓会編	会誌 第拾四号 (大正八年)	大正8年9月
新潟県立工業学校同窓会編	会誌 第拾六号 (大正九年)	[大正9年]
新潟県立長岡工業学校同窓会編	会誌 第拾八号 (大正十年)	大正10年8月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	廿周年記念会誌	大正11年5月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	会誌 第廿二号 (大正十二年)	大正12年7月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	会誌 第廿四号 (大正十三年)	大正13年8月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	会誌 第廿七号 (大正十五年十月)	大正15年10月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和二年一月 会誌 第廿八号	昭和2年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和二年七月 会誌 第二十九号	昭和2年8月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和三年一月 会誌 第三十号	昭和2年12月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	会誌 昭和三年九月 第三十一号	昭和3年9月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和四年一月 会誌 第卅二号	昭和4年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和四年九月 会誌 第卅三号	昭和4年9月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和五年一月 会誌 第三十四号	昭和5年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和五年新秋 会誌 第卅五号	昭和5年9月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和六年一月 会誌 第三十六号	昭和6年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和七年二月 会誌 第三十七号	昭和7年2月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和七年十二月 会誌 第三十八号	昭和7年12月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和九年十二月 会誌 第四十号	昭和10年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十年十二月 会誌 第四十一号	昭和11年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十一年十二月 会誌 第四十二号	昭和12年1月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十二年十二月 会誌 第四十三号	昭和12年12月
新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十三年十二月 会誌 第四十四号	昭和14年1月
※ 新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十四年十二月 会誌 第四十五号	昭和14年12月
※ 新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十五年十二月 会誌 第四十六号	昭和16年1月
※ 新潟県立長岡工業学校同窓会編	昭和十七年九月 会誌 第四十七号	昭和17年9月

※長岡市立中央図書館にもあり。[[ ]]は推定。

\* 東海学園大学教育学部教授

広田照幸ら「旧制工業学校卒業生の社会移動に関する研究—山形県立鶴岡工業学校を事例として—」<sup>1)</sup>では、山形県立鶴岡工業学校を対象に、その利用層や卒業後の地域移動、職業移動について分析を行っている。同校の社会的機能として、「中学校よりも幅広い層に近代的セクターへの移動機会を提供する」<sup>2)</sup>役割を担っていたことを指摘している。

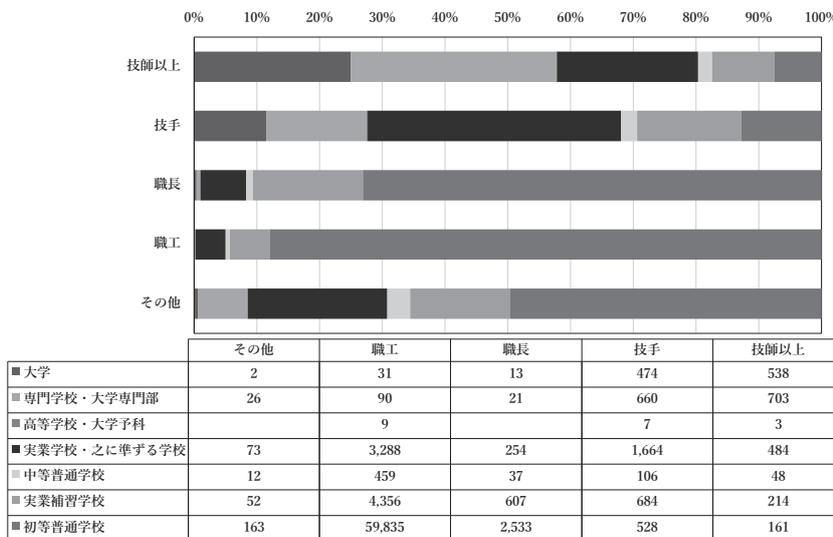
小路行彦『技手の時代』<sup>3)</sup>は工業分野における経営組織の形成という観点から工業学校を取り上げている。本書前編では「工手と技手の養成に明治以降の教育機関がどのように取り組んできたか」「どのように評価されてきたか」<sup>4)</sup>について論考している。本書後編では、機械工業、化学工業、電気、通信、製紙等の分野の経営組織に着目している。本書では、学歴と、工業現場における地位（「技師」「技手」「職工」）との関連についてふれられている。すなわち、「大学は技師、高等工業学校は技手または技師、甲種工業学校は技手、乙種工業学校は職工または職工長であった。」<sup>5)</sup>という対応関係があり、学歴と工業現場での役割とが明瞭に線引きされていたという、工業教育政策について言及している。ここから分かるように、甲種工業学校の本来の目的は「技手」養成であった。技師は上級技術者であり、「技手」は「下・中級の技術者」をさした<sup>6)</sup>。例えば、他の先行研究では昭和5年時点の「学歴別・地位別の機械器具工場男子従業者数」が示されている（【図表2】参照）。

この点について、天野郁夫『教育と近代化—日本の経験』でも、「工業技術者の階層区分」<sup>7)</sup>について言及されている。同書では、「高級技術者・中級技術者・下級技術者」の三階層と、それぞれの教育程度について、大学（工部大学校・工科大学・理工科大学の工業関係諸学科、工学部等）卒業者＝「高級技術者」、工業専門学校卒業者＝「中級技術者」、中等工業学校卒業者＝「下級技術者」というような対応関係が示されている。

以上のように、先行研究の見解からすると、基本的に、工業学校卒業者は「下級技術者」を養成するという前提があるように捉えられる。しかし、小路行彦『技手の時代』にもあるように、入職後にスキルアップを果たして、「身分上昇」<sup>8)</sup>した例もあった。また同書では、「鉱業、化学工業、瓦斯及電気工業、飲食物工業」と「紡績工業、機械器具工業、印刷工業」とで処遇が異なることも指摘されている<sup>9)</sup>。

このように考えると、個別の学校を取り上げて、実情を明らかにし、工業学校の社会的機能に関する知見を積み重ねる必要がある<sup>10)</sup>。本稿では、【図表1】に示した旧長岡工業学校同窓会『会誌』中の「会員消息」等にある記述を用いて、卒業後の進路、キャリアアップなどについて明らかにする。

なお、「技師」と「技手」の関係についてふれておくと、「技手」は「第二次世界大戦以前には工場組織の普遍的な職位であり、技師の要求と現実の製造工程を結びつけ、製造現場を統率する中下級技術者として活動」<sup>11)</sup>したとされている。



【表序-1 学歴別・地位別の機械器具工場男子従業者数（1930年6月）】（沢井実『日本の技能形成 製造現場の強さを生み出したもの』名古屋大学出版会、2016年、2頁）をもとに本稿筆者がグラフを付した。

【図表2】「学歴別・地位別の機械器具工場男子従業者数」（1930年6月）

## 1. 長岡工業学校設置の経緯

『官報』、あるいは『新潟県教育百年史 明治編』を参照して、長岡工業学校設置の経緯についておさえる。

長岡工業学校設置の経緯、沿革については【図表3】に示した。明治34年、【図表4】に示した地図の北東、村松町に新潟県立工業学校の設置が認可され、明治36年に開校した。ただ、当初設置された村松町は交通が不便であること、特に工業が盛んというわけではないということなどから、明治42年に長岡に設置し直され、明治44年には村松にあったものは廃止となっている。

明治32年、実業学校令が公布され、新潟県においても実業教育の振興がはかられた。工業学校の設置について、県議会においては、明治36年度内に竣工させる計画であった。位置は中蒲原郡とされていたが、五泉町と村松町との間で誘致合戦となった。校地の提供という点で村松町に決定し、明治34年9月に「新潟県立工業学校」の設置が認可され、明治36年5月に開校した<sup>12)</sup>。なお、明治39年には村松工業学校に改称している<sup>13)</sup>。

県立工業学校は3年制、定員は210名、入学資格は14歳以上であった。『新潟県教育百年史』によると、村松町は「中蒲原郡の中でも、交通不便」<sup>14)</sup>であったとされ、また『長岡の歴史』にも「別にこれといった工業を持っているわけではない」<sup>15)</sup>と記されている。そのような状況下で、当地に工業学校設置が決まった理由としては、①機業地であり機業家が政界に対する発言力を持っていたこと、②村松町に中等教育機関がなかったこと、③歩兵第三〇連隊がおかれ道路網が発達していたこと、④用地の獲得が容易であったこと、などが記されている<sup>16)</sup>。

しかし、やはり「交通不便」がネックになり、村松町周辺からの入学者だけでは募集人員を充足でき

【図表3】新潟県立長岡工業学校沿革

年月	学校沿革等	官報
明治34年9月	「新潟県立工業学校」の設置認可	文部省告示第百七十六号 新潟県中蒲原郡村松町ニ工業学校規程ニ依リ新潟県立工業学校ヲ同県南蒲原郡加茂町ニ農業学校規程甲種程度ニ依リ新潟県立農林学校ヲ設置ノ件認可セリ (『官報』第5472号、明治34年9月27日、342頁)
明治36年5月	授業開始	
明治39年4月	校名を「新潟県立村松工業学校」と改称	文部省告示第三十七号 新潟県立高等女学校ヲ新潟県立新潟高等女学校、新潟県立工業学校ヲ新潟県立村松工業学校、新潟県立農林学校ヲ新潟県立加茂農林学校、新潟県立商業学校ヲ新潟県立新潟商業学校ト明治三十九年四月ヨリ何レモ改称ノ件認可セリ (『官報』第6804号、明治39年3月8日、233頁)
明治42年2月	長岡市に県立工業学校を設置	文部省告示第四十一号 新潟県長岡市長岡千手町ニ工業学校規程ニ依リ新潟県立工業学校ヲ設置シ明治四十二年四月ヨリ開校ノ件認可セリ (『官報』第7697号、明治42年2月25日、507頁)
明治44年3月	村松工業学校廃止	文部省告示第十七号 新潟県中蒲原郡村松町ニ設置セル新潟県立村松工業学校ヲ明治四十四年三月三十一日限り廃止ノ件認可セリ (『官報』第8285号、明治44年2月6日、121頁)
大正10年4月	校名を「新潟県立長岡工業学校」と改称	文部省告示第八号 新潟県長岡市長岡千手町ニ設置セル新潟県立工業学校ノ名称ヲ大正十年四月ヨリ新潟県立長岡工業学校ト変更ノ件認可セリ (『官報』第2534号、大正10年1月15日、234頁)

〔『官報』および新潟県立長岡工業高等学校校舎竣工創立八十周年記念事業実行委員会編『創立80周年記念 越の廣野八十年』（新潟県立長岡工業高等学校校舎竣工創立八十周年記念事業実行委員会、昭和58年、243-248頁）、新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史 明治編』（新潟県教育庁、昭和45年）などから作成。〕

なかった。また、中学校入学希望者が代替として入学し本来の機能を果たさなかったことも『新潟県教育百年史 明治編』で指摘されている<sup>17)</sup>。そのような理由から、設置されて間もない頃から位置についての問題点が指摘されていた。明治41年には工業補習学校が附設されたが、設置当初からこのような問題を抱えていた村松工業学校は廃止することとなった。改めて、長岡市に県立工業学校が設置されることとなったのである。なお、大正10年には県立工業学校の増設とともに、「新潟県立長岡工業学校」と改称している。

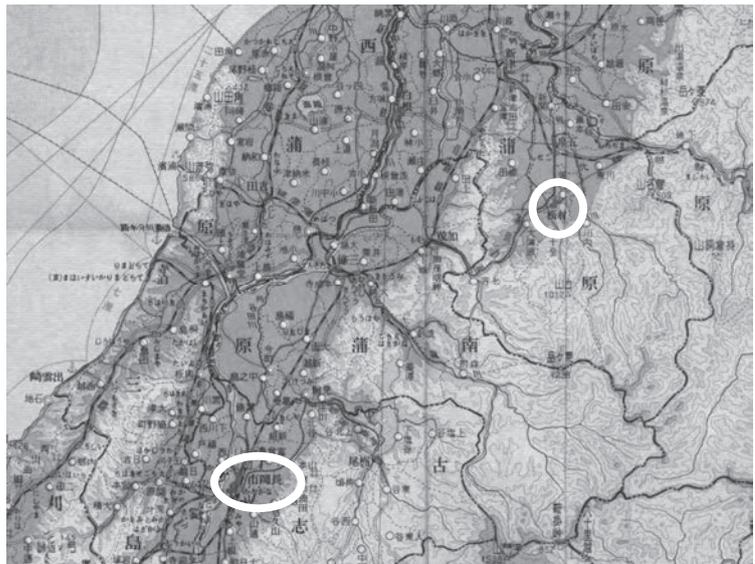
つまり、一度は県立工業学校が新潟県に設置されたものの、廃止に

たり、明治42年に再興したといえる。先行研究によると、「新潟県立工業学校」の「設立年月」が「42.2」（明治42年2月）とされており<sup>18)</sup>、また『新潟県案内』などにも「明治四十二年の創設」<sup>19)</sup>とある。これは、この再興の年を示しているものであり、新潟県における最初の県立工業学校の設置認可は明治34年（開校は明治35年）であったと言えよう。『文部省年報』中、明治36年度の「公私立実業学校別一覧（実業補習学校ヲ除ク）」をみると、「新潟県立工業学校」が明記されており、「位置」は「越後国中蒲原郡村松町」、創立年は「同（明治一筆者註）三十六年」とあった<sup>20)</sup>。

## 2. 『新潟県統計書』にみる進路

『新潟県統計書』において、長岡工業学校の卒業生の進路がどのように示されていたのかを検討する。

【図表5】は『新潟県統計書』の中にある、「前年度本科卒業者ノ本年度三月一日現在ノ状況」などの数字をもとに作成したものである。『新潟県統計書』の表記の仕方が年度によって異なるので、筆者が集計し直した。一時、不況期に卒業生数の減少がみられるが、概して大半が実業従事者であり、進学はわずかであった。上級学校等への進学者は、通算して4%ほどで、およそ82%が実業に従事した。「官吏公吏等」「学校教員」も1～2%であった。



〔星野恭誌編『最新 新潟県地図』、昭和9年（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/8312199>）より。地図中の○は筆者が追記した。〕

【図表4】新潟県立工業学校の設置位置

【図表5】長岡工業学校「前年度本科卒業者ノ本年度三月一日現在ノ状況」等

西暦	校等進学	実業専門学	実業従事者	官吏公吏等	学校教員	一年志願兵	候補生、其他	不詳	死亡	計
1907	4	21	3	0	1	0	2	0	31	
1908	4	21	2	0	3	0	0	0	30	
1909	1	15	2	1	0	4	0	0	23	
1910	4	29	0	2	2	0	0	0	37	
1912	5	25	0	2	0	0	0	1	33	
1913	14	52	0	0	1	0	0	0	67	
1915	7	32	7	0	2	4	0	0	52	
1916	1	34	0	0	1	1	0	0	37	
1917	0	52	0	1	0	3	0	1	57	
1919	0	56	0	1	1	5	0	1	64	
1920	0	62	1	1	1	4	0	1	70	
1922	1	78	1	6	4	14	0	1	105	
1923	0	105	2	1	2	6	0	1	117	
1924	9	81	0	3	2	20	0	0	115	
1925	4	89	0	2	0	19	0	0	114	
1927	6	93	0	2	1	7	0	0	109	
1928	2	85	0	2	0	17	0	0	106	
1929	0	30	2	1	1	6	0	1	41	
1930	5	50	14	0	3	16	0	0	88	
1933	5	93	3	0	4	0	0	0	105	
1934	2	96	0	0	0	0	0	0	98	
1935	1	99	0	0	3	8	0	1	112	
1937	5	95	0	0	0	10	0	0	110	
1938	5	117	1	0	0	3	0	1	127	
1939	0	104	0	0	0	6	0	0	110	
通算	85	1,614	38	25	32	153	2	9	1,958	

〔新潟県編『新潟県統計書』（明治43～昭和16年）中の「前年度本科卒業者ノ本年度末ノ状況」等の数字をもとに作成。〕

### 3. 「会員消息」等の記述内容

「会員消息」等の欄に寄せられた記述内容について検討する。工業学校を終えた後、入職した組織内でどのような地位にあったのかということに着目する。

冒頭に述べたように、小路行彦『技手の時代』には、「大学は技師、高等工業学校は技手または技師、甲種工業学校は技手、乙種工業学校は職工または職工長」<sup>21)</sup>の養成を目的としたとある。

「会員消息」等の記述内容をみると、「技師」、「技手」、「職工」など、様々な呼び名が示されている。先行研究によると、「現業員の人々と工手・技手・技師との非常に大きな違いは、前者が日給であったのに対して後者が月給であったということである。それから、現業員の場合にはボーナスがない場合が多いが、工手・技手・技師はボーナスが出る」<sup>22)</sup>というように、待遇に違いがあった。また、一方で、職場内での地位は固定的なものでなく、「職工から工長への昇格ルートを歩んだものがかなりいた」<sup>23)</sup>とされている。以下、記述内容から、具体的な進路や、就職後の地位の変化をみる。

#### (1) 「職工」

大正13年機械科を卒業し、その後、芝浦製作所で勤めたI・Tについて、「我は職工なり、労働は神聖なりと上下一致叫ぶ芝浦製作所にて御奮闘」<sup>24)</sup>の様子が紹介されている。この記述は大正13年8月発行の『会誌』の記述であり、「職工」として入職したことがわかる。

昭和2年に機械科を卒業し、「愛知時計電機株式会社 設計課内」のM・Iは、昭和2年の『会誌』に、「不景気は相変わらず続いて困りますこととございませう」と在校生の就職を案じた上で、「工業学校を卒業して会社に四年位で技手になって社員に来ると御考へになる方は決して私共の会社に入社してはなりません。私共の会社は中等学校を終った位では少くとも十年は職工でくらさなければなりません。」<sup>25)</sup>と、すぐに「技手」にはなれないという注意喚起をしている。

呉海軍工廠に「仕上工」として就職した卒業生の記述をみる。昭和11年1月の『会誌』に掲載された、「卒業以来五年の新年を迎へ」<sup>26)</sup>たS・Mは、昭和5年に染織科を卒業した。同工廠では、「益々事業繁雑に付き一昨年来臨時職工を募集」し、「上海事変以来募集人員は一万五千人を採用した」ことが記述されている。「臨時職工は六ヶ月以上従事し優良の者には体格検査により本職工として転雇」されると情報提供をしている。大量に募集しているとは言え、「素人は絶対に採用しない事になつて居ます」としている。彼は、「仕上工として就職し只今はデイズル機関の修理として働いて」いた。「長工出身者は少く僅か三人」であり、「生徒をどし／＼送つて下さい」と人材を求めている。

昭和9年に電気科を卒業したI・Kは、昭和11年1月の『会誌』に「無事大阪の当汽車製造会社へ先月の十九日から出勤することになりました」<sup>27)</sup>と記している。「職工二千人からの大工場」であり、彼は「此の中の電気溶接」を担った。「現在の所期限付臨時職工として高知工業出の昨年入つた人に手先として使はれてゐます」と表現しており、「未だ／＼技術の習得中で実際に仕事をさせるのは約半年位経なければさせない」と一定の訓練期間を要すると述べている。また、「溶接の方は中等学校出は昨年から漸く取り始めた」とあり、「今年は私を混ぜて二人、合計結局五人」、多くは小学校卒業者だったのか、「他は小学校出で全部で二十人位」と述べている。

ここに示したのは、卒業後10年以内の者であり、「職工」として入職し、しばらくの間は訓練を積んで、そうして「実際に仕事をさせる」というキャリア形成がみられる。

#### (2) 「技師」

次に、技師、あるいは技師長となった卒業生に関する記述をみる。工業学校卒業生が技師になる道について、昭和14年の『会誌』に次のような記述がみられた。「全国工業学校卒業生の官庁就職者に昇進

の道を拓け」との主張である。筆者は「KK生」とあった。

(前略) 殊に時局多端の折柄、筆者が益々其の感を深くすることは全国工業学校卒業生の官庁就職者が昇進の道を鎖され、常に逆境にあり、所謂椽の下の板持ちといふ諺の如く、同情すべき立場に置かれて居ることである。

由来工業学校卒業生の官庁就職者は、殆んど絶対と云つてもよい程技師、即ち高等官の地位には昇り得ないのである。

母校卒業生について考ふるに、創立以来卒業生を出すこと三十五回であるが、筆者の知つて居る範囲で母校卒業のみの肩書きで官庁で技師になつた者遺憾ながら僅かに一名(それも卒業後三十年にして漸く昇進)の情ない状態であるが、之も余程の抜擢との事である。<sup>28)</sup>

先にも述べた通り、基本的に工業学校卒業生は「下級技術者」の養成であり、また先行研究でも指摘されているように、昭和に入ると、高等工業学校出身者が「下級技術者」となり、そのポストを奪った、と言及されている<sup>29)</sup>。

この記述に見られる通り、工業学校卒業生が技師となる道は狭き門であった。次に示す「会員消息」を見る限り、卒業後すぐに技師となった者は少ないが、卒業後しばらく経過した後は「技師」との記載がいくつみられた。

明治40年に機械科を卒業したM・Tについては、大正8年の『会誌』に、「氏の締つた顔堂々たる風采は流石に浅野造船の技師たるに恥ぢず加ふるに久しき経験と技能に於てをやである」<sup>30)</sup>と紹介されている。また、明治41年に同じく機械科を卒業したG・Tについては、大正15年の『会誌』に「魚沼水力電気会社技師長」<sup>31)</sup>と、同年同学科を卒業したF・Tについては、大正8年の『会誌』に「此度又々一級昇級、村上水電株式会社主任技師として就職、かゝる努力家の続出を望む、アツパレ／＼」<sup>32)</sup>と賞賛されている。F・Tについては、大正15年の『会誌』に「村上水力電気会社技師長」<sup>33)</sup>と紹介されている。このほか、大正15年の『会誌』に「北越機械工業株式会社技師長」(明治43年機械科卒、A・H)<sup>34)</sup>、同じく「品川明治ゴム会社技師」(大正7年応用化学科卒、W・K)<sup>35)</sup>などの記載を確認できた。

大正12年に機械科を卒業したH・Kについては、昭和10年の『会誌』に、「大正十二年機械科卒業、生産係担当青年技師(中略)なくばあの満洲を走る電気機関車もまとまらぬと言ふから人気も大いしたものだ、(中略)主任の御眼鏡違はずして昇給のトップを切つて居ること又羨しい」<sup>36)</sup>と、卒業後10年余りを経て「技師」を務めたようである。

以下に示したのは、昭和2年に応用化学科を卒業したY・Kについての、昭和14年の『会誌』の記述である。

(前略) 母校卒業以来京都石山にある東洋レーヨン会社研究室に閉ぢ籠り、生来の明晰な頭脳と真面目さを以て種々の研究に没頭せられつゝあつたが、其の功報えられ、工業学校出の最右翼として技手より技師に抜擢せられ、大学卒業生に伍して孜々として研究を継続されつゝあり、将来益々工業界の為一大研究されんことを祈る。<sup>37)</sup>

卒業以来「東洋レーヨン会社研究室」で研鑽を積み、卒業後10年余りを経て「技手より技師に抜擢」されたようである。大学卒業生と肩を並べて工業界の牽引を期待されている。

各会社の史料などで確認する必要があるが、以上のような同窓会誌の記述をみるかぎり、技師の地位についた卒業生は確かにあった。ただし、卒業後の年数をみると、短くて8年という例があるが、多くは十数年が経過している。工業学校卒業直後に技師になったケースは、ここに見る限りなかった。時代

的な変化を精査する必要があるが、工業学校卒業者が技師となる道がなかったわけではない。

また、卒業後さらに長い年月を経ると、職場内での役割を示す「工場長」「工場主任」などの記載もみられた。20年近くの経験を積むと、「名古屋紡績会社新潟工場長」（明治42年機械科卒、Y・H）、「東京モス名古屋製紙工場長」（明治43年染色科卒、S・J）<sup>38)</sup> など、工場長として勤めるケースがみられた。あるいは、その工場の「主任」や「支配人」という肩書きが付されていたケースも確認できた。

### (3) 進学、進学準備、学び直し

卒業直後に進学、あるいは進学準備、あるいは働きながら夜間に学び、一度就職した後に学校に入り直すという事例がみられた。以下、卒業年の順に『会誌』の記述内容を検討する。

明治43年に染織科を卒業したY・Tは、明治45年の『会誌』に、「(前略)は高工入学志望者の一人であつたが遂に京都高工へ入学せられた」<sup>39)</sup>と紹介されている。また、明治45年に機械科を卒業したT・Tについては、大正6年の『会誌』に「(前略)君は卒業後直ちに早稲田大学理工科に入れ蛍雪の功空しからず本年目出度卒業せられ技師として北越製紙株式会社長岡工場に勤務せらる」<sup>40)</sup>と、学校卒業後すぐに技師となっている。

大正4年に土木科を卒業したA・Tについて、大正6年の『会誌』に「芽出度く仙台在東北帝大工学専門部へ入学さる」<sup>41)</sup>と、また、大正7年に機械科を卒業したA・Rについては、大正8年の『会誌』に「スツカリ早稲田の奥におさまりかへつて御座る」<sup>42)</sup>などとあり、大学の専門部へ進んだことが分かる。同じく大正7年機械科を卒業したT・Yについて、卒業後20年近く経過した昭和10年の『会誌』に、「大正七年機械科卒業更に仙台高工卒業」し、「芝浦の人事本家工人課に御勤務せられ人事行政の敏腕を振ひ名声を博する」<sup>43)</sup>と紹介されている。

ほかに、大正10年に染織科を卒業したS・Rは、その年の『会誌』に、「目出度く京都高等工芸校に入学せられたり、兎に角クラスの誇りなり」<sup>44)</sup>と紹介されている。大正13年の『会誌』では、大正10年に染織科を卒業したK・Sが「明治専門より」と題して、「未だ学校の様子はさつぱり分りません、明日から筆記があります、教科書四十円許り買ったが細い原書許りで之を一々辞書と首つ引きしねばならぬ」と苦労を綴っている。続けて、「寮のある所は少し小高い所です、窓から首を出すと本校の素晴らしい煙突と建物がゾロリと煉瓦姿を並べてゐる間に無数の松が一寸単調味を殺してゐます」<sup>45)</sup>と寮生活を紹介している。同じく、大正13年に電気科を卒業したK・Tは、卒業直後に「長岡高工に在学」<sup>46)</sup>、昭和3年に電気科を卒業したK・Mも、翌年の『会誌』に「神戸高等商船学校航海科」と記載されており、「今度の入学者で新潟県人は私一人」、「私のクラスでは工業学校卒業二名、商船学校卒業一名其他三十七名は皆中学校出の者ばかり」、「全校で新潟県人は六名」<sup>47)</sup>などと進学先を紹介している。

先に示した【図表5】からも分かるが、工業学校卒業直後に高等教育機関へ進んだ者は少数であった。次に述べるように、一度は就職して、いわゆる「学び直し」という狙いで高等教育を受けたケースが多かったのかもしれない。会社を退職して学校へ入学した例をみる。明治43年に機械科を卒業したK・Eは、明治45年の『会誌』に「芝浦を辞された後早稲田理工科へ入学さる」<sup>48)</sup>と紹介されている。同じ号の別の箇所には、「芝浦製作所罫画工に入職して精勤中なりしが決する処ありて本年五月早稲田理工科へ入学せらる」<sup>49)</sup>とある。

現新潟県立長岡工業高等学校の80周年記念誌に掲載されている回顧であるが、大正6年応用化学科卒業生による記述がある。彼は「缶詰の缶を製造す」ることに傾注し、「会社を設立すること六社、其の目的達成するや、悉く分離独立せしめ、現在は最初に設立せる会社の相談役」を務めた。長岡工業学校卒業後か、「創立早々の北海製缶に入社」し、「前人未踏の缶詰内面塗料の製造と其の塗装法並びにブリキ印刷」に携わった。しかし、その方法について「未知の世界」であり、「調べんとしても国内に書籍がない」ことから、「もう一段と勉強をと考え、卒業後自宅で死物狂いの入学準備を行なつた」<sup>50)</sup>と

振り返っている。いつ、どの時点でどの学校に入学したのかは記されていないが、実務上の必要性から学び直したことがわかる。

このようなケースは、他にも『会誌』に多くみられた。大正11年に電気科を卒業したS・Sは、「すつかりの電気の方をあきらめて米穀肥料商と云ふ商人になつて」、実務上の必要性からか「大原簿記学校に入学して勉強」<sup>51)</sup>した。

昭和9年に機械科を卒業したS・Yは、「法政大学専門部政治経済科の補欠試験に受験」し、「合格」として報告をしている。また、彼はそれまで「汽車製造株式会社」に勤務していたが、合格を機に同社を退職したようである。「退職の際今後の母校の卒業生の採用方御願致した所、心よく認めて呉れて来年度の新卒業生をよこして呉れ」<sup>52)</sup>と、長岡工業学校卒業生の紹介を求められている。

退職をせずに働きながら学んだ例もみられた。大正7年に機械科を卒業したM・Tについて、「新潟鉄工所に御勤務中、夜は予備校に通はる」<sup>53)</sup>と紹介されている。

大正12年に機械科を卒業したT・Iは、「昼間塵埃漂ふ中に終日働き、夜間学ぶ」という生活を送った。「財団法人協進会に依り経営せられ」た歳前工業専修学校のことか<sup>54)</sup>、「元歳前高工の附設の夜学校」<sup>55)</sup>で勤務後に学んだようである。

大正12年応用化学科を卒業したT・Tは長岡高等工業学校を経た後であるが、「長岡高工を卒へ、東京ライトインキ株式会社に就職され目下現職の儘東京工業大学応化科に入学」<sup>56)</sup>と、在職のまま東京工業大学へ入学している。「毎日本所の会社から大岡山の大学まで約一時間を費しての御通学とは大分骨が折れる」と、会社での勤務を終えて通学したことが分かる。

そのほか、実現したのかどうかは不明であるが、「独学」でスキルアップを考える卒業生もみられた。昭和2年電気科を卒業したK・Kは、卒業後すぐに「四月三日の夜行にて上京の途につき、五日より工場に通勤」と『会誌』上で報告している。そして、「今は一生懸命で独学」をしており、そのうち「東京物理学校か又は東京工業専修学校かへ入学すかも」<sup>(ママ一筆者註)</sup>と考えている。さらに「東京鉄道局教習所専門部電気科の入学試験を受ける心算」<sup>57)</sup>と目標を掲げている。

昭和11年電気科を卒業したA・Sは、「資本金九千万円で社長は陸軍大将吉田豊彦で日満合同の半官半民の特殊会社」に勤めた。また、「会社へ入つてから会社から金を出して高等工業へ入れてくれる様にもなつて居ります」<sup>58)</sup>と勤務先を紹介している。「特殊会社」ではあるが<sup>59)</sup>、積極的な就学支援をする会社もあった。

このようにみると、そのときに勤めている会社を退職して入学をし直したケース、あるいは在職のまま入学したケースがみられた。入学先として、高等工業学校、工業を学ぶ各種学校などを確認できた。先行研究によると、初等教育修了者は現場で「腕を磨く」ことが多かったと指摘されているが、神戸三菱職工学校など、工業学校卒業生の中にも職工として働きながら夜間に学ぶ者があったと指摘されている<sup>60)</sup>。

#### (4) 初等・中等教員等

次に、教育・研究分野の道へ進んだ卒業生について検討する。明治45年に染織科を卒業したM・Sは「三島郡片具小学校の『ティーチャー』」として「教育の任」<sup>61)</sup>に就き、同年に機械科を卒業したN・Sについては「直江津小学校に熱心に教導」<sup>62)</sup>などであり、小学校教員となったケースもわずかにみられた。しかし学校教員になった者に関する記述は中等学校や各種学校教員のものが目立つ。明治41年に機械科を卒業したM・Tは、「除隊後御宅にあり今春暫く母校へ奉職されしが後辞されてスイートホームを作られた」<sup>63)</sup>と、一時的に母校に勤めたことが分かる。大正9年に応用化学科を卒業したK・Hは、「母校に於て研宥の効空しからず此度実業学校教員資格を授けられる一層母校の為め御勉強勵あらん事を切望す」<sup>64)</sup>と母校での活躍を期待されている。同じく大正9年染色科を卒業したS・Sについて、「母校卒業後一時母校に勤務されしも学に志し米沢高工に入」ったものの、「再び元の巢が恋しく母校へ逆戻り」

し、「後輩の為教鞭を取られつゝあり」<sup>65)</sup>と紹介されている。

また、大正10年に機械科を卒業したM・Sは、「母校を(大正10年一筆者註)十年に卒業して科長のお骨折りで内務省の木つ葉役人として三年許りぶら／＼県内で過し」た後、「東京石川島造船所造機設計課に入社」した。入社タイミングで「日本大学の機械科の編入試験をうけて、その年の九月から通ふ事」となり、「夜間授業」を受けたと近況報告をしている。彼は、大正15年8月に日本大学を卒業し、「在学中文検実業教員予備試験をうけて幸に合格」している。「先生になる積りで教育学なんといふ本に嚙りついて見る事も」あり、ついに(昭和2年4月一筆者註)「此の四月石川島造船所を止しまして、東京市立の浅草工業専修学校に専任教諭として奉職」した。同校は「機械、電機、建築の三科」があるが「専任の教師が少なく、嘱託の方が多いため」、彼は「機械科をひとりで切まわさねばならぬ立場」<sup>66)</sup>であった。なお、この記述の5年後、昭和7年の『会誌』には、彼について、「東京製図学講習会『機械製図法講義』」<sup>67)</sup>という著書を出版したと紹介されている。

### (5) 高等教育機関教員、研究者

最後に、大学教員や研究の道に進んだ卒業生に関する記述をみる。大正9年機械科を卒業したI・Sは、大正15年の『会誌』に「独力力行遂に物理学校を卒へ大阪工業学校教諭(数)」<sup>68)</sup>と、さらに後、昭和14年の『会誌』には、「母校が持つ只一人の教授である奇才益々御自愛を願ひたい所である。此度又任教授八級俸下賜と発令された」<sup>69)</sup>と紹介されている。なお、昭和14年の同窓会名簿には、「神戸市外深江神戸高等商船学校」<sup>70)</sup>とある。卒業後、物理学校に進み、「大阪工業学校」<sup>71)</sup>教諭としての勤務を経て、神戸高等商船学校教授に就いたという経歴が分かる。

あるいは、大正11年に電気科を卒業したI・Sは、およそ15年後、昭和12年の『会誌』に、「扱て此度は小生の学位獲得に対してわざ／＼御祝辞を賜り(中略)小生の研究論文は『モルヒネ』習慣の原因に関するものにて取立て、御紹介申上ぐる程のものにては無之、(中略)小生只今は慶大医学部講師として勤務致し居り」<sup>72)</sup>と記している。このように医学の世界で活躍した例もあった。

大正15年に染織科を卒業したT・Hは、「前の勤務先大島製鋼所が工場閉鎖になり只今藤野氏の下に歯車研究に専念」し、「同氏指導の下に去る二月『新研究歯車』上巻が出版発行のはこびとなり目下下巻編輯に没頭」<sup>73)</sup>との記述にみられるように、歯車の理論や設計法の研究に従事した<sup>74)</sup>。

昭和4年染織科を卒業したS・Kは、「専修大学専(ママ一筆者註)問部商科」を経て「早稲田大学商学部」に進んだ後、「計理士、商学士」<sup>75)</sup>として活躍した。

## おわりに

以上、同窓会誌の記述内容から、次の点を指摘できる。ここに示した限りであるが、工業学校を卒業して高等工業学校などの高等教育機関を経て、技師として入職できた事例はあったものの、工業学校卒業後すぐに技師になるという事例はみられなかった。工業学校を卒業して技師になるには、『会誌』の記述をみる限り、卒業後十数年を要した。また、記述内容から、転職する事例が多くみられた。工業学校で培った基盤を活かしながらも、実務に就き、新たな知識や技能を身につけて、いわば「上昇移動」を果たした様子を確認できた<sup>76)</sup>。

「上昇移動」を果たすために、卒業後さらに学歴を積んだ卒業生は珍しくはなかった。夜学の機会を利用するなど、就業後に「骨が折れる」思いをしながら高等教育機関等で学んだ様子をうかがうことができた。

学校教員となった者は母校、その他工業系の学校、あるいは中学校の理科教員などを勤めた。大学教員となり、研究者となった例も複数みられた。

冒頭に述べた通り、大学卒業者が技師、高等工業学校卒業者は技手や技師、甲種工業学校卒業者は技

手として勤めるという対応関係があり、学歴別の階層が形成されていたことは、先行研究にも指摘されている。しかし他方で、上昇志向をもつ者は、さらに上級学校への進学を目指し、あるいは働きながら学び、あるいは退職（休職）して学び直しをした。現代で言うところの「リカレント教育」<sup>77)</sup>、あるいは「リスキング」に近い動きが実態として存在した、とみることもできよう。加えて、具体的な学校名は分からないが「金を出して高等工業へ入れてくれる」会社も存在したことは、注目できる。さらには、工業のみならず商船、医学分野の高等教育機関で教鞭をとる例も確認できた。本来「上昇移動」のための手段として上級学校へ進学したものと思われるが、後進を育てる道を目指す者が輩出されたことも興味深い点である。長岡工業学校の一事例ではあるが、卒業後の経過をたどると、上記の対応関係は決して固定的ではなかったと言えよう。

本稿では、キャリア形成が分かるものを選んで同窓会誌の通信欄を検討した。卒業後にどのような進学や就職をして、就職後、どのようなキャリアを積んでいったのか、今後、数量的に精査する。

【謝辞】本研究を進めるにあたり、新潟県立長岡工業高等学校同窓会事務局長・三川俊克氏、同事務局次長・中島隆雄氏に史料閲覧のご高配を賜った。また、矢田貞行東海学園大学教授に御指導賜った。ここに謝意を表する。

## 註

- 1) 広田照幸・森直人・寺崎里水「旧制工業学校卒業生の社会移動に関する研究—山形県立鶴岡工業学校を事例として—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻、2003年、65-97頁。以下、発行年は奥付等の表記のままとする。
- 2) 前掲、「旧制工業学校卒業生の社会移動に関する研究」、80頁。
- 3) 小路行彦『技手の時代』日本評論社、2014年。
- 4) 前掲、『技手の時代』、iii頁。
- 5) 前掲、『技手の時代』、4頁。
- 6) 前掲、『技手の時代』、1頁参照。
- 7) 天野郁夫『教育と近代化—日本の経験』玉川大学出版部、1997年、95頁。
- 8) 藤村聡「書評 小路行彦著『技手の時代』」『企業家研究』第12号、企業家研究フォーラム、2015年、55頁。
- 9) 前掲、『技手の時代』、344頁。
- 10) 竹村俊哉「近代日本における工業学校生の就職に関する地域的展開の一考察—青森県を中心として—」(『青森県立郷土館研究紀要』第38号2014年、119-133頁)では青森県立工業学校、青森市立工業徒弟学校を事例に、その卒業生の進路を分析し、「就職に関する地域的展開」について考察した。
- 11) 前掲、藤村聡「書評 小路行彦著『技手の時代』」、55頁。
- 12) 新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史 明治編』新潟県教育庁、昭和45年、762頁参照。以下、同書を引用、参照する場合は、「『新潟県教育百年史 明治編』、762頁参照。」のように略記する。
- 13) 『官報』第6804号、明治39年3月8日、233頁参照。
- 14) 『新潟県教育百年史 明治編』、762頁。
- 15) 今泉省三『長岡の歴史 第六巻』野島出版、昭和47年、393頁。
- 16) 『新潟県教育百年史 明治編』、762頁参照。
- 17) 『新潟県教育百年史 明治編』、762頁参照。

- 18) 「表 19 明治期創立工業学校（徒弟学校を含む）設立年順一覧」三好信浩『日本工業教育発達史の研究』風間書房、2005年、319頁。
- 19) 山川健『新潟県案内』北光社書店、大正3年、20頁（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/951995/>：令和6年11月4日閲覧）。
- 20) 文部大臣官房文書課編『日本帝国文部省第三十一年報 皇朝三十五年』、明治38年、689頁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/809170/>：令和6年11月4日閲覧。なお、この前年度の『文部省年報』の「公私立実業学校別一覧」には、「中魚沼郡立中魚沼染織学校」「中頸城郡立農業学校」「新潟市立新潟商業学校」（同編『日本帝国文部省年報 皇朝三十五年』、明治37年、670頁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/809169/>：令和6年11月4日閲覧）の3校のみである。
- 21) 前掲、『技手の時代』、4頁。
- 22) 沢井実「近代大阪の工業教育—技術者はどのように育成されたのか—」関西大学経済・政治研究所編『セミナー年報』、平成28年、163頁。
- 23) 前掲、『技手の時代』、187頁。
- 24) 新潟県立長岡工業学校同窓会編『会誌 第廿四号（大正十三年）』、大正13年8月、42頁。以下、同誌からの引用は「『会誌』24号、大正13年8月、42頁。」のように略記する。また、人名等を除き旧字は適宜新字に改めた。以下、執筆者を示す場合はイニシャルで示す（読みは推定）。
- 25) 『会誌』30号、昭和2年12月、22-23頁。
- 26) 『会誌』41号、昭和11年1月、90頁。
- 27) 『会誌』41号、昭和11年1月、74-75頁。
- 28) 『会誌』45号、昭和14年12月、4頁。
- 29) 『技手の時代』、324頁参照。「（前略）<sup>（ママ—筆者註）</sup>高等専門学校出身者が下級技術者のポストに進出するようになり、工業学校卒者の下級技術者としてのポストが奪われた」とある。
- 30) 『会誌』14号、大正8年9月、56頁。
- 31) 『会誌』27号、大正15年10月、23頁。
- 32) 『会誌』13号、大正8年1月、54頁。
- 33) 『会誌』27号、大正15年10月、23頁。
- 34) 『会誌』27号、大正15年10月、23頁。
- 35) 『会誌』27号、大正15年10月、23頁。
- 36) 『会誌』40号、昭和10年1月、121頁。
- 37) 『会誌』45号、昭和14年12月、32頁。
- 38) 『会誌』27号、大正15年10月、23-24頁。
- 39) 『会誌』1号、明治45年2月、53頁。
- 40) 『会誌』10号、大正6年、59頁。
- 41) 『会誌』10号、大正6年、61頁。
- 42) 『会誌』13号、大正8年1月、50頁。
- 43) 『会誌』40号、昭和10年1月、120頁。
- 44) 『会誌』18号、大正10年8月、40頁。
- 45) 『会誌』24号、大正13年8月、45-47頁。
- 46) 『会誌』24号、大正13年8月、42頁。
- 47) 『会誌』32号、昭和4年1月、35頁。
- 48) 『会誌』1号、明治45年2月、51頁。

- 49) 『会誌』1号、明治45年2月、54頁。
- 50) 以上の記述は、「創立八十周年を祝いて」（新潟県立長岡工業高等学校校舎竣工創立八十周年記念事業実行委員会編『越の広野八十年—新潟県立長岡工業高等学校創立八十周年記念誌—』新潟県立長岡工業高等学校校舎竣工創立八十周年記念事業実行委員会、昭和58年、48-49頁）より引用した。
- 51) 『会誌』34号、昭和5年1月、62頁。
- 52) 以上、S・Yについての記述は『会誌』41号、昭和11年1月、94頁。
- 53) 『会誌』13号、大正8年1月、49頁。
- 54) 東京市政調査会編『東京市の実業補習教育』東京市政調査会、昭和3年、144-149頁参照（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1280165/>：令和7年10月11日閲覧）。
- 55) 『会誌』29号、昭和2年8月、71頁。
- 56) 『会誌』35号、昭和5年9月、8頁。
- 57) 『会誌』29号、昭和2年8月、79頁。
- 58) 『会誌』42号、昭和12年1月、88頁。
- 59) 彼の勤務先については、「満洲電業鞍山送電事務所」（長岡工業学校同窓会編『昭和十四年十二月現在 会員名簿』、昭和14年12月、10頁）との記載があった。
- 60) 沢井実『日本の技能形成 製造現場の強さを生み出したもの』名古屋大学出版会、2016年、99頁参照。
- 61) 『会誌』10号、大正6年、59頁。
- 62) 『会誌』13号、大正8年1月、55頁。
- 63) 『会誌』1号、明治45年2月、50頁。
- 64) 『会誌』31号、昭和3年9月、40頁。
- 65) 『会誌』28号、昭和2年1月、68頁。
- 66) 以上、M・Sについての記述は『会誌』29号、昭和2年8月、75-76頁。
- 67) 『会誌』37号、昭和7年2月、110頁。
- 68) 『会誌』27号、大正15年10月、24頁。
- 69) 『会誌』45号、昭和14年12月、30頁。
- 70) 長岡工業学校同窓会編『昭和十四年十二月現在 会員名簿』、昭和14年12月、12頁。
- 71) 「大阪工業学校」というのは、大阪市立工業学校（後の大阪市立都島工業学校）のことか。中等教科書協会編『大正十五年五月現在 第二十三版 諸学校職員録』（大正15年、中等教科書協会、213頁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/937376/>）には、「市立都島工業学校（甲）」の「代、幾、」の教員として彼と同姓同名の人物が記載されている。なお、同校の名称変更については、大正15年4月2日の『官報』に以下の通り記されている（内閣印刷局編『官報』第4080号、大正15年4月2日、52頁、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2956231/>）。

文部省告示第二百十号

大阪府大阪市北区善源寺町ニ設置セル大阪市立工業学校ノ名称、修業年限、入学資格ヲ大正十五年四月ヨリ左ノ通変更ノ件認可セリ

大正十五年四月二日

文部大臣 岡田良平

名 称 大阪市立都島工業学校

修業年限 六年

入学資格 尋常小学校卒業程度

- 72) 『会誌』42号、昭和12年1月、85頁。
- 73) 『会誌』40号、昭和10年1月、112頁。
- 74) 藤野篤之『新研究歯車 上巻』（文成社、昭和8年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1211689/>）の「序」2頁に、「猶著者は本書の著作を通じて終始多大なる労作を与へられた（中略、T・H）君並に本書の為に諸種の資料を提供された各位に厚く感謝する」と記されている。
- 75) 『会誌』42号、昭和12年1月、83頁。
- 76) 前掲、沢井実「近代大阪の工業教育」、167頁参照。
- 77) 望月厚志「『教育原理』としての『リカレント教育』の基本的概念と歴史及びその『教育思想』（『茨城大学全学教職センター研究報告（2021）』、2022年、233-248頁）によると、「リカレント教育」の概念は1970年代にOECDが提唱して以降、時代によって変化している。「recurrent」は「回帰、還流、循環」という意味をもち、教育と労働が繰り返し行われるのが本来的な「リカレント教育」である。